

# 音楽を愛好する心を育てる授業づくり

## － 作曲・鑑賞の題材を通して －

学習開発コース (11220901) 板垣和子

本研究では、生涯にわたって音楽を希求し、愛好する心を育てる音楽教育のあり方について考察する。そのために、日常生活の中で最も身近に行っている「鑑賞」と最も自己のオリジナリティーを表現しやすい「作曲」を題材として取り上げ、生徒が主体的に取り組むことができる授業のあり方を追究した。

生徒が生涯にわたって主体的に音楽を愛好していくためには、その前提となる音楽の基礎的な知識や技術、経験が不可欠である。「型」を理解してこそ、初めて「個性」を発揮することができると思う。

[キーワード] 音楽鑑賞・作曲 音楽の授業 音楽を愛好する 基礎的な知識・技術・経験

### 1 問題の所在と方法

人は音楽と触れ合うことで、無意識のうちに自分の心を癒し、自ら活力を与えようとしている。音楽の授業の中で、音楽との出会いに関わる印象深い感動体験ができるかどうか、生涯音楽を愛好していけるかどうかの大きな鍵である。

これまでの自らの授業や授業参観を通して感じることは、生徒が主体であるはずなのに、教師の目線からの授業が多く、生徒の立場に立っていない授業になってしまっているということである。

授業における問題点を次のように考えた。

(1) 知的理解が中心で、感覚的に納得し満足することが少ない。(鑑賞)

音楽作品に関する知識を詰め込み聴かせることで、作品に対する理解が深まったと教師が自己満足してしまいがちである。知識を理解させようとするあまり鑑賞することに集中できず、作品に関する印象が残らなくなってしまうことが多々ある。

知識理解と鑑賞をバランスよく配当する授業時間の組み立てが重要である。

(2) 教師主導の授業になってしまいがちである。(作曲・鑑賞)

少ない授業時間の中で、要領よく効果的な授業をしようと意図するあまり、すべてをお膳立した教師のペースの授業になりがちである。生徒自身が考えて学習する時間的余裕や場が

少なく、目標達成に向けて、あるいは結論を導くことに向かって急いでしまいがちである。

計画的に生徒がじっくり考えられるような時間的な余裕をもてるように組み立てる必要がある。

(3) 上手にできることを求め、技術指導に偏りがちである。(作曲)

具体的には、歌曲の作詞作曲をさせているが、最初から一般的に上手だといわれる旋律の作り方を強く指導してしまいがちである。

既存の作品の型を一通り教えた上で、「歌いやすく」とか「自然な流れの中にポイントを1つおく」などのテクニックは、生徒の創作過程を見守り失敗を体験させながら、必要とするときにタイミングよく与えていくことが大切である。

(4) 「音楽を教えること」と「音楽で教えること」のバランスが悪くなりがちである。(作曲・鑑賞)

音楽を教えることばかりが多くなってしまふ。芸術音楽が教科科目として存在する理由の大きい部分を下記の内容が占めていると考えられる。

音楽で教えることの内容の例

- ① 調和することのすばらしさ (個ではない全体の姿)
- ② 時代背景やものの考え方が音楽の在り様と密接に関わっていること
- ③ 「自己肯定感」と「共感し合う心」

上記のような問題を抱えながら授業を行っていたのだが、以前勤務していた高校で、「基礎的

な知識を定着させる場面」と「生徒が自分で考えて行動する場面」のバランスをとりながら、作詞作曲の授業を行ったところ、非常に生き生きとした活動の様子が見られた。教えられた基礎に基づきつつ、生徒は自分で考えたことが作品作りに直接反映するので、とてもやりがいを感じ、一生懸命取り組んでくれたのだと思われる。「自由」ではなく「やり方がわかりながらの適度な自由裁量」がよかったのだと考えられる。

「音楽鑑賞」においても、教え込むのではなく生徒が自分たちで調べ、発表する場面を取り入れた。その結果、積極的にその活動に取り組もうとする意欲が見られた。

この経験から、基礎をしっかり踏まえさせた上での生徒主体の生き生きとした授業づくりを考えていきたい。

## 2 先行研究の検討

(1) 鈴木寛(1995)は、音楽教育のあり方を「S MLの音楽教育」として、次の3つのレベルがあると述べている。

S Sound 音響と聴覚のレベル 感覚  
M Musicality 音楽性のレベル 感性  
L life 人間性のレベル 感受性

SやMを踏まえて、初めてLのレベルに到達することができる。基礎的な知識や技能がしっかり身につけていないと真に音楽を愛好することはできないのである。

(2) 鈴木寛(1996)は、同時に日本古来の「守破離理論」について、次のように述べている。

創造とは経験の再構成である。模倣は創造の初期段階であり、対立概念ではない。模倣と創造の二律背反を超えた指導理論として、守破離理論を提唱したい。

(3) 小野瀬照夫(2009)は、新学習指導要領について、感想と展望を次のように述べている。

音楽には理屈抜きの感動体験は不可欠である。しかし、音楽教育は楽譜に密着した指導が「生涯にわたり芸術を愛好する」ための教育という点から見ても必要不可欠である。バランスが大切である。

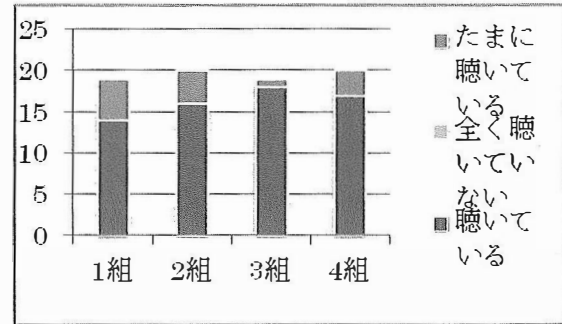
## 3 実践と結果(明らかになったこと)

(1) 音楽鑑賞についてのアンケート調査

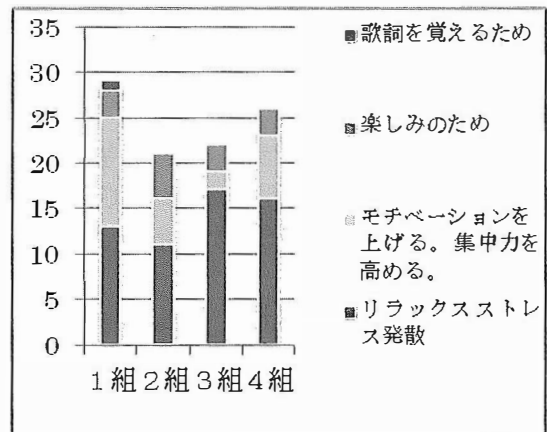
まず、実際に授業づくりを考える上で、生徒

の実態を把握するために、山形県内の公立H高等学校において、第1学年の音楽選択者のうち78名を対象に「音楽鑑賞についてのアンケート調査」を実施した。質問内容と結果は以下のようである。(アンケート調査より抜粋、数字は人数を表す。)

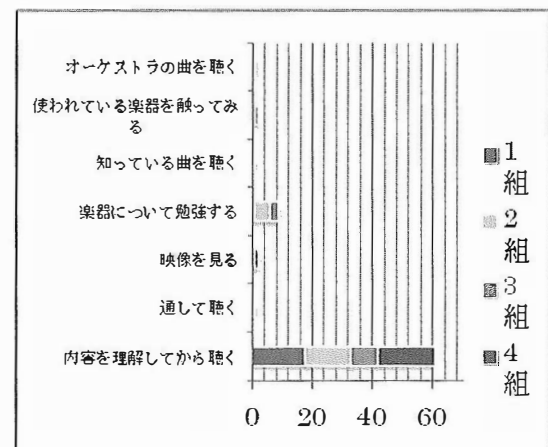
質問1 あなたは日頃音楽を聴いていますか。  
(グラフ1)



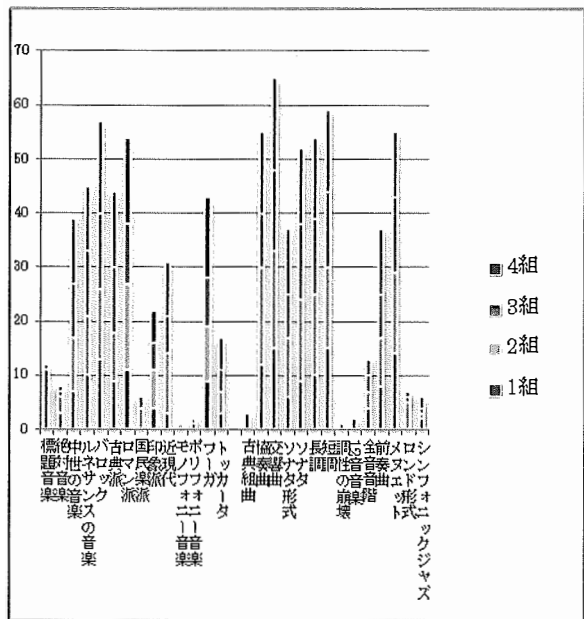
質問2 聴くことに何を求めていますか。  
(グラフ2)



質問3 音楽の授業でクラシック音楽を聴くとき、どうすればより興味を持って聴くことができるとおもいますか。(自由記述),(グラフ3)



質問4 音楽用語について、聞き覚えのあるものを○で囲んでください。(グラフ4)



アンケート調査からわかったことは、次の2点である。

- ①生徒は音楽を聴くことが好きであり、聴くことによって「安らぎ」や「モチベーションを上げること」を求めている。
- ②「授業の中でどうすればより興味を持って聴くことができるか。」という質問に対して、ほとんどの生徒が「内容を理解してから聴くとよいと思う。」と答えている。

また、音楽用語についても、興味を持って耳にしていることがわかる。このことから、様々な知識を得て音楽をもっと深く理解したいという意欲を持っていることがわかる。

(2) 授業実践

授業実践①は、教職専門実習Ⅰにおいて山形県内A中学校で行った作曲の授業実践である。

(題材) まとまりのある旋律(AA')を作ろう。

時間	主な学習内容
1	(1) リズム学習(実際のリズムと音符を一致させる。) (2) 既存の歌曲の形式を分析する。 →AA', ABA'の形式が効果的だと理解する。 (3) 歌いやすい音の流れについて順次進行や同じことの繰り返しなどが効果的であることを理解する。

2	(4) 4分の4拍子8小節AA'のまとまりある旋律を作る。 (5) 旋律としての美しさを考える。
3	(6) 作った旋律を演奏し、お互いに聴き合い、互いに良いところを学び合う。 (7) 既存の歌曲のすばらしさに気づかせるべくフィードバックする。



(AA'の作品例)

授業実践②は、教職専門実習Ⅱにおいて、山形県内の公立H高等学校で行った音楽鑑賞の授業実践である。

(題材) 時代による様式を理解しながら、音楽作品を鑑賞しよう。

●取り上げた作品

- J S バッハ 管弦楽組曲第2番(バロック)
- W A モーツァルト 交響曲第40番(古典派)
- カミーユ・サン＝サーンス 組曲「動物の謝肉祭」(ロマン派)

●学習した形式

古典組曲, ソナタ形式, ソナタ, 交響曲, 近代組曲

時間	主な学習内容
1	グループごとに割り当てられた作品について調べ、発表のためのパネルを作る。担当の作品を実際に聴いて、予習をする。
2	J. S. バッハ 管弦楽組曲第2番 ① 生徒が調べたことを発表する。 ② 足りないところを補足説明。スコアも活用しながら作品を鑑賞する。 ③ 下記の内容について考えさせ話し合う。(根拠のある言語活動の実施) ・作品に盛り込まれた風刺や皮肉を理解する。 ・複数の演奏を聴き比べる。 ・作品が生まれてきた必然性を考える。
3	W. A. モーツァルト 交響曲第40番(古典派)

	進め方は、第2時と同じ。
4	カミーユ・サン＝サーンス 組曲「動物の謝肉祭」(ロマン派) 進め方は、第2時と同じ。
5	まとめ(振り返り、確認テスト)

#### 4 考察

作曲の授業の実践については、中学校1年生を対象として、リズム学習の最初から作品の発表まで、3時間設定という短い時間の中で行ったので、AA「旋律を完成するだけで精一杯で、内容をきめ細かく指導することはできなかった。

それでも、生徒にとっては音符を書くところから初めての体験であり、音符と実際の音が一致する楽譜を作ることができたということは大変な喜びであった。最後に感想を書かせた。それによれば、「できた!」という達成感を述べていた生徒が、90パーセントであった。大変良い経験をさせることができたと思う。残り10パーセントの生徒は、能力もありもっと難易度の高いことにチャレンジしたいという気持ちが残った。

勤務校の高校では、個人の能力に応じて幅を持たせた内容にして、能力の高い生徒にはその能力を最大限発揮できるようにしたいと考えている。それぞれの生徒の心情を詩とした作詞作曲に取り組んでいきたい。

鑑賞の授業実践では、先行研究やアンケート調査の「作品の内容について学習してから鑑賞すると、より興味を持って鑑賞できると思う。」という生徒の回答に基づいて、授業の内容や進め方を考え実施した。「知識を得て深く鑑賞しようとする」姿勢が見られ、大変意欲的であった。突然のグループ学習に多少戸惑っている様子も感じられたが、回を重ねるごとに上手にできるようになった。言語活動を活発にするという意味でも、グループ学習は意味が大きいと思われる。

内容についての大きな目標として、「時代」と「形式」を捉えることを設定した。生徒はそれぞれの特色や構造をしっかりと理解してくれたと思う。今回は、バロック音楽からスタートしたが、時代を捉えるということに重きを置き、中世時代の音楽からスタートすれば、楽譜の成立

などに触れ、もっと内容を深めることができた。

また、特にロマン派のサン＝サーンスの作品では、内に秘められたメッセージを捉えさせたいと思い、生徒同士の話し合い(言語活動)をねらったが、途中で終わってしまった。今後の研究課題の1つになった。

「生徒の発表」と「内容を学習してから、鑑賞する」手立ては、生徒の学習意欲を喚起するのに、大変有効であった。

#### 5 到達点と課題

到達点として次の4点が挙げられる。

- (1)作曲においては、馴染みやすいまとまりのある旋律を作る最初の段階はクリアできた。
- (2)オリジナル作品を作ることは生徒にとって、大きな達成感が得られた。
- (3)記譜力の育成は、読譜力の向上につながり、様々な作品を楽譜を見ながら鑑賞できるようになった。
- (4)グループ学習にも積極的に取り組むことができた。

課題は、次の2点である。

- (1)これまでの勤務校での作曲の実践に積み上げ、生徒の日常の生活から生まれた思いを大切に作詞作曲を実施し、さらに、根拠を持って、お互いに批評し合う場面を充実させていくこと。
- (2)音楽鑑賞について、高校生としてどこまで楽曲を掘り下げていくのか、内容を検討し、教師として多くの充実した引き出しを持つようにカリキュラムを作ること。

#### 引用・参考文献

- 鈴木寛：「S. M. L. の音楽科教育 (I) ～ (IV)」, 『実技教育研究』第9号～第12号 1995～1998
- 兼平佳枝：「日本の学校音楽教育における音楽的思考の展開過程」, 『北海道教育大学紀要 教育科学編』60 (1), pp.47-54, 2009
- みつとみ俊郎：「音楽はなぜ人を幸せにするのか」, 新潮選書, 2006
- 小野瀬照夫：「新学習指導要領 感想と展望」, 『教育音楽』, 第53巻第5号 pp.42-43, 音楽之友社, 2009